

和銅遺跡(秩父市)





和銅遺跡の碑





高齢にもかかわらず金井塚先生が先導します



和銅遺跡

和銅遺跡
和銅造り
和銅造り

和銅造り
和銅造り
和銅造り

和銅造り
和銅造り
和銅造り

和銅造り
和銅造り
和銅造り

和銅造り
和銅造り
和銅造り

昭和三十六年九月一日発見

埼玉県教育委員会
秩父市教育委員会



埼玉県指定
文化財旧跡

和銅遺跡

秩父が史上で有名になったのは奈良時代に和銅奉献の記事が続日本紀にあらわれてからであります。

元明天皇の慶雲五年正月十二日、武蔵国秩父郡内より差出された自然銅は、郡司から朝廷に献上されたものです。発見者は新羅から帰化した「金上死」と云われております。

発見地や産出地などは諸説がありますが、この地（秩父市黒谷地内……旧原谷村大字黒谷）祝山が発掘の地と思われれます。この山は秩父古生層と第三紀層のあわさり目で、たまたま自然銅が地上に露出したものを里人が見つけたものですが、帰化人も多く住んでいたことからこれが銅とわかったものようです。この山や附近には露天掘跡や銅洗堀とか、殿池・和銅山と云う地名が残されております。

又、近くに自然銅を神体とする聖神社や、和銅宝物館などがあります。和銅山の南方山続きに金山と呼ばれる一連の山塊があります。江戸期に採掘されたと思われる銅の選鉱場・製錬所跡・散在するタガネ掘りによる横穴坑などがありますが、和銅沢・蔵人屋敷の地名もこのあたりにのこされております。

和銅奉献によって朝廷は年号を和銅と改め、更に大赦や課税の免除など行ないました。この後我が国最初の貨錢「和同開珎」が铸造されたのも歴史上非常に意義深い出来事であります。

昭和三十六年九月一日指定

埼玉県教育委員会
秩父市教育委員会







和銅の神の恵み

聖神社から美の山へ続く坂道を上っていくと、まもなく街なかの騒がしさから離れ、棚田が広がる山里風景が目に見え込んできます。さらに「和銅露天掘り跡」へと続く、この木々の間の道を進むと、まるで時代が昔に戻ったかのような錯覚を覚えます。

飛ぶ鳥よりも速く毎日都へ和銅を送り届けた「羊太夫の伝説」が残されていることなどあつて、さまざまな場面で当時に思いを馳せることができる場所、それが「和銅遺跡」と言えるでしょう。

神の恵みの和銅十三個をご神宝として祀り、聖神社が和銅元年（七〇八年）二月十三日に創建されてから、黒谷には「十三」にまつわる縁起が残されています。十三氏子（十三戸の氏子のこと）が住んでいる「美の山」を流れ下る十三谷、春秋の祭りも十三日に決まっていました。

十三個の和銅石のうち、大小二個は現在も宝物庫に伝えられています。十三谷のうち何本が銅洗堀に合流し、何本が荒川や横瀬川に直接流入しているか、今となつては確認の手だてはありませんが、沢筋の数は十三本に近いようです。

なお、銅が産出される土地特有の植物と言われる「花筏」（俗称「筏草」）や俗称のみしか伝えられていない「二葉羊歯」が和銅山にだけあるという話なども、このあたりでは言い伝えられています。



秩父市
秩父市和銅保勝会



羊太夫の伝説

不思議な羽を持つ家来の助けで、
空飛ぶ鳥より速く黒谷の和銅を



何とこんなところに円空仏を読み込んだ句があった



和銅開珎のモニュメント



日本通貨発祥の地とある



正面が露天掘り跡



拡大して見る





和銅遺跡

慶雲五年(七〇八年)今から千三百年前、ここ武蔵国秩父郡から和銅(自然銅)が発見され都へ献上されました。これを喜んだ元明天皇が年号を「和銅」と改め、罪人の罪を許したり軽くしたり、高齢者・善行者の表彰、困窮者の救済、官位の昇進を行い、その上に武蔵国の税の免除がされたと「続日本紀」に書かれています。その中に、和銅発見に関係したといわれる日下部宿禰老、津島朝臣堅石、金上元(金上无とも)の名前も見られます。都から遠く離れた秩父が、歴史の表舞台にあらわれ、一躍脚光を浴びました。

催鑄銭司の長官に多治比真人三宅麻呂が任命され、やがて日本最初の通貨とされる「和同開珎」が発行されます。国家の体制が整い、都城建設を進め、通貨時代の幕開けを告げることになった献上和銅の初めての産出場所は、ここ「和銅露天掘り跡」なのです。地質学上「出牛―黒谷断層」といわれる断層面の一部が露出した状態で、和銅山頂から、麓を流れる銅洗堀まで幅約三メートルのくぼみとなって残されています。

近くには和銅元年に創建され、和銅献上に関係が深いと伝えられる聖神社があり、大小二個の和銅石(自然銅)・和同開珎・和銅製の雌雄一对の蜈蚣がご神宝として収められています。なお、付近に散在する地名に和銅献上時を偲ばせるものが多いのも歴史の深さを物語っていると思われれます。

● 催鑄銭司は金の鑄造を担当する役所

● 雌雄一对はメスとオスの一組



和銅露天掘り跡

目の前の急斜面を蛇行する見学道を登れば、千二百年の往時の面影を残す和銅露天掘り跡を間近に見ることが出来ます。地質学上では「出牛―黒谷断層」と言われますが、造山活動による基盤の秩父中古成層と、堆積による第三紀層の断層の露頭に噴出、凝結した自然銅が和銅（ニキアカガネ）と呼ばれたのです。

新編武蔵風土記稿（文政十二年・一八二八年）に土地の人の言い伝えとして、「銅山の様子」を「東に向かって急坂の小道を八、九町（二キロ弱）も曲がりくねりしてよじ登ると頂上に出る。大岩がよきによきそびえ立っている。その色は銅色（赤黒く光沢のある色、つまりあかがねいろ）がかっている。大昔、掘り進んだというところは平たい大岩の山を南北に掘り尽くして中断したので、大岩が東西に向き合ってそびえ立っている。中断したところを今は和銅沢と呼んでいる。」と書いてありますが、今この岩盤上に立てばまさまざとその風景が甦ります。

秩父市
秩父市和銅保勝会



【和銅製蜈蚣】(実物大)

和銅献上当時、祝典に際し文武百官を遣わすべきところ「百足」の百にちなんで雌雄一対の和銅製蜈蚣を元明天皇から贈ったと伝えられるものです。

【和銅(自然銅)】(実物大)

和銅献上当時、聖神社のご神体とされた自然銅13個のうち、大小2つが現在もご神宝として祀られています。これは小さい方で、重さが0.48kg(128匁)のものであります。

露天掘り跡



露天掘り跡





「和銅」を伝える地名の数々

黒谷には、銅の産出、献上、鑄造、運搬などにちなんで残されたと思われる地名、言い伝えがたくさんあります。

「銅泉」に湧く清水の水底に自然銅の転石が光る。見上げれば「和銅山」をえぐって走る「和銅露天掘り跡」。「殿地」を役所とし、「竹(タケエ会計)」の指示で、掘り出した和銅の泥を「銅洗堀」で洗い流し、「鑄銭房」で鑄た(鑄造した)和銅開珎を洗い浄めて「押出」の手で都へ送り出します。「樋の口(火の口)」は鑄造の火元で、「破風屋(破風矢)」が煽り立てて火力をつけます。残り火の始末は「燠」が引き受け、火種は絶やさず。銅をとった残りの土石は流れ出して「中島」を作る。精錬で抜き取る硫黄独特の臭いが立ちこめて「硫黄の下」まで漂う。「祝山」もいつしか銅につきものの硫黄のある山ということで「硫黄山」と呼ばれていた時代もありました。その「祝山」の神殿も早くに「岩下」に「聖神社」となって祀られ、和銅の歴史を見守り続けています。

※『』は古い地名です。古地名道標をたどってみてください。

秩父市

秩父市和銅保協会





銅洗堀(どうせんぼり→どうねんぼう)とある





古地名 ● どうねんぼう
〔銅洗堀 銅銭堀〕

和銅石の泥を洗い流した沢、
鑄造した銭を洗い浄めた沢を意味する。
古来からの土地の俗称。



殿地(どんじ)とある





古地名 ●

殿地^{どんじ}

和銅採掘時の高官の屯所(役人が詰めていた場所)とされる。蔵人屋敷とも呼ばれ、「とんし入(どんじいり)」の古地名内にある。

正面の山に和銅遺跡が広がる



バスに乗って帰ります





参考ホームページ

<http://www.chichibu.co.jp/~wado/iseki/wadoiseki.htm>